

ISHIGAKI CITY

# Tourism Platform Conference

入場  
無料

石垣市観光プラットフォーム会議

**24** Admission Free  
JANUARY 2020  
OPEN 17:30 START 18:00 END 20:00  
Ishigaki City Health & Welfare Center 2F

令和 1月24日 金  
2年

開場 17:30 開演 18:00 終演 20:00  
石垣市健康福祉センター2階 視聴覚室

基調講演

## 世界の潮流における リゾートアイランドの在り方

谷口 正和 (石垣市観光アドバイザー)

高校生プレゼンテーション

## 私達の島の課題と持続可能な未来

Chura★I (高校生人材育成プロジェクト)

八重山青年会議所プレゼンテーション

## 石垣島の自然環境住民意向調査について

前田 弘樹 (八重山青年会議所)

パネルディスカッション

## アンケートから紐解く島の観光の在り方

【パネリスト】金城 徹 (八重山デジタルズビューロー)、西仲野正巳 (石垣市観光交流協会)  
前田 弘樹 (八重山青年会議所)、伊集 満枝 (八重山高校教諭)、Chura★I (高校生人材育成プロジェクト)

【コーディネーター】谷口 正和 (株式会社ジャパンライフデザインシステムズ代表取締役社長)

世界規模での多種多様なツーリズム・ムーブメントが賑わいを見せる中、石垣島が目指すべきリゾートアイランドのあり方について石垣市観光アドバイザーの谷口 正和氏が語り尽くします。また、昨年度実施した地元住民及び来訪者向けアンケートを更に掘り下げた目線で今年度も実施し、その結果内容や今後の展望について地元高校生がプレゼンをおこないます。それから、八重山青年会議所による自然環境住民意向調査のプレゼンなどを踏まえて、それぞれのアンケート結果から見える地域の課題を基に、これからの石垣島の観光シーンについてディスカッションも実施します。

主催：石垣市 企画部 観光文化課 ☎ 0980-82-1535



令和元年度 石垣市観光プラットフォーム会議  
会 議 要 旨

日時：令和2年1月24日（金）18時～20時

場所：石垣市健康福祉センター視聴覚室

進行：観光文化課 課長 仲大底まゆみ

① 開会

② 基調講演

「世界の潮流におけるリゾートアイランドの在り方／谷口 正和(石垣市観光アドバイザー)」

今日は最初に、社会課題はどのようなところにあるのかということについてお話したい。課題発見というものに対して一番重要なのは、我々は世界から色々なお客様を招いているなかで、きちんと受信をし、これが課題ではないかという課題策定のプログラムである。そして、その課題が大きく変容・変化し、次のステージに移ろうとしている今の世界的な状況の中で、何が課題なのかというものに対して、共通理解が顕在化しているものをしっかり見つめなおさなければならない。

最近では環境問題とか気候問題、こういうものだけを別枠で取り上げるような区分けの論理があるが、そうではなく、すべての垣根が外れ、連鎖する社会に対する認識論ということが、実のところの情報社会である。情報というのは、足元に回帰して、活かせるものを活かしあう、ということが大きな社会構造である。我々も、個別個別の中でホームページを作ったりするなど、既にプラットフォームがあり公開されているにもかかわらず、社会的な資産を使うという体質や慣れがない。情報社会というのは、情報が整理されていないと使うことができない。世界は今、フリーアドレスで、それぞれがそれぞれの興味関心で磨きあうことができる。例えば石垣でも、足元に薬草あり、というハーブアイランドのエッセンスがある。我々は足元にあるものを活用し、島の豊かさを掘り起こしながら深めることができる。

今、地球社会は非常に高い流動性の中にある。自分が生かされ、自分にとって活用できそうなエリアに人は自在に移動したいという願いがある。自分が活かされる場所へ移動しようという流動の中で、自身が徹底的に持っているものを公開し、デッドストックを社会財に変えるというようなかたちで稼働活性すれば、どう活かされるかというものに対する存在価値

みたいなものが見えてくる。自分の興味関心や、あらゆるネガティブにとらえていたような欠点が、見方を変えれば全部長所・個性という具合に、流れを変えることができる。むしろ特徴があれば活かされるという構造の中で、実は世の中に活かされていない人・物・場所が多くある。社会は今、たった一人、一回の人生、唯一あなたというようなことを、自らの大きな基盤にして築きなおすところに来ているという気がする。

未来の地球社会経営というのは、小さな単位である個人経済圏もしくは、地域社会の中の特徴経済圏みたいなものが連鎖して、新しく相互が助け合い、お互いがコアになれるように磨きあっていくような社会を築くものである。例えば、マーケットと言うのは消費のインパクトによって成り立っているが、消費と生産という具合に区分けしたものの垣根を外して、一人一人が生産にも寄与できる、そして、一回出た良い知恵や良い道具は何回も使うというようにする。未来に対して再投資ができるように、お客様がどういう思考を見せて、人々はどのような願いを未来に持っているのかという社会財に対して、先鞭をつけ、先行して事例を提示するということを我々は引き受けている。

それが、実は今ツーリズムの中で大きな課題として顕在化している。人の生涯の一番の価値は、自分が生きている時間の過ごし方である。自分らしく生きたか、何をしたか、こういう問いかけの中で、人生に対する経営という概念が出てくる。自らが逆に評価をされるような存在価値の構造からすれば、実のところ一番重要な商品は、自分自身である。あなたは買う人ではなくて、あなた自身が色々なところから声がかかって評価を受ける。そういうように、色々な知恵やアイデアを出して、色々な人の力を借りて、地球社会は組み合わせられていく。我々が全部なんでも引き受けるということではなく、色々な人の力を借りていくというような開かれた社会が、未来の地球社会経営である。例えば、情報社会のよく言われるものに情報公開というものがあるが、これは、何がそこにあるのかわからなければ使うことができない。個人で言えば、自分が何に興味があり、何に絶対時間を割いて、圧倒的に自分の中でやりたいというビジョンを作る構想力がある、という見えざる資産である。そういったものを磨くためには、どのように自らに投資をし鍛えていきたいのか、色々なところを移動し、体験し、そして何が大事なのかというのを直観する中での気づきというのが、非常に重要になってくる。こういった流れの中で、ツーリズムというのは、自分を活かし、学び、再び自分の中に戻ってきて、その体験が自分の中で優れて、自分は何が好きなのか、という気づきになっている。一人ひとりが個別の技術・能力を買いながら、地球社会の未来経営というところに手を携え、何がお互いの力になりうるのかということプラットフォームで交換しあう中で、我々のビジョンとその行動を事業にしてくれる人が現れる。課題を解決すると

いうことが新しい事業となる。

昨今どこも SDGs といった持続可能ということに対し問いかけが増えているが、サステナビリティという言葉よりも、むしろ、サバイバルリストと言うべきである。我々自身が、大きな社会課題として気づいたことを広げ、新たな事業を築くために、社会貢献としてどのような投資ができるのかという、社会課題を解決できるようなステップを用意する必要がある。経営は、コストとリスクというものに対して、過去の事例を計数として計っていると、急速に役割がなくなっていく。日本の企業で言えば、短期回収ばかりしているから、過去のアイデアから逃れられない。そういう意味で言うと、地球社会の経営と一人一人の幸福論というようなものが、一般論ではなく、それぞれの中で、自らの人生を生き切ったかという問いかけに進んでいくべきではないか。何が課題なのかということに対して、その解決のために、プログラムが組み合わせられて、それがインテグレートされていく。まずは、課題発見のための受信、整理が必要である。そしてその課題発見に対しての解決のシナリオを作るためには、色々な人の力を借りることが必要である。今日は、それを今から皆さんにお話ししたいと思う。

### ③ プレゼンテーション①

「石垣島の自然環境住民意識調査について／前田 弘樹（八重山青年会議所）」

### ④ プレゼンテーション②

「私たちの島の課題と持続可能な未来／C h u r a ★ I（高校生人材育成プロジェクト）」

### ⑤ パネルディスカッション「アンケートから紐解く島の観光の在り方」

#### 【パネリスト】

金城 徹（八重山ビジターズビューロー）

西仲野 正巳（石垣市観光交流協会）

前田 弘樹（八重山青年会議所）

伊集 満枝（八重山高等学校教諭）

C h u r a ★ I（高校生人材育成プロジェクト）

#### 【コーディネーター】

谷口 正和（株式会社ジャパンライフデザインシステムズ）

谷口：

各パネリストへ、プレゼンテーション（アンケート結果）の感想を問う。

金城：

我々観光に携わるものとして一番の課題は、観光客に満足してもらうことだが、そこで、住民も一緒に満足して、お互いに楽しくやっていけるという環境が持続的な観光として継続していくことに通じていくと思う。消費する観光から体験型の観光にシフトしつつあるなかで、物を買って満足するというより、地元に来て体験する、地元の人と触れ合う、そういったところを非常に求められていると感じる。地元の人たちと触れ合って、何か感じてもらって、帰っていただく。それが次のリピーターにもなっていく。自然環境保護も併せて、そういった取り組みをやっていけば、観光も持続的に続いていくのではないか。

西仲野：

バス会社に27年勤めていたが、10年ほど前、夏休み期間中の小・中学生を対象に、バス停留所にまつわる話やその土地の特色をまとめた冊子を作成し、併せて路線バス乗り放題のチケットを販売する、という取り組みを行ったことがあるが、当時はあまり売れなかった。アンケートでも2次交通に対する問題が出ているが、路線バスを乗り継いで観光するというのは、とてもハードルが高い。その他、アンケートで観光客のお客様がその土地の歴史や文化が知りたいという部分も、物見遊山を乗り越えて、だんだんと体験型に移行しているのかなというのを肌で感じる。また、沖縄の観光では、沖縄の食事はまずいというのがはじめのころはあったが、近年JTBがとったアンケートによると、食事の満足度は北海道に続いて2位となっており、非常に驚いている。

前田：

石垣島に限らず、環境への意識というのが日本全体で今沸き起こっているということを反映している数値なのかなと感じた。全国的に環境に対する意識が高まっているなかで、今ある資源を見出してツアーにするのも大事だと思うが、逆に、今壊れつつあるものをあえて見せて、それをツアー化するような、社会課題のツアーというのも面白いのかなと、高校生の報告を聞いて思った。

谷口：

高校生がバス会社をつくって、前田さんの言うようなツアーを事業化する等、社会テストも含めた形で、新しいプロジェクトをやってもらおうと、彼らのバス体験がぐっと活きると思う。

伊集：

高校生たちとのアンケート活動を通して、観光に対する価値観を変えていかなければいけないということを切実に感じた。郷に入れば郷に従えではないが、そこに入ったら、そこでの過ごし方を楽しむ。その中で自分が何を感じるのか、自分の変化を楽しむというような観光の価値観に変化していかないと、共生はできないのではないかと、子どもたちと話をしながらも感じている。

谷口：

今のリゾート開発は、送客するビジネスというとらえ方が強い。保全・保護だけでは、白くなったサンゴは戻らないが、もう一回、そこを畑として組み立て直すために、いろんな人の力を借りる行動力というのは、やはり高校生といった若者が持っている。社会課題として取り組むということを大きなファクターにして、もっと優位性の高いものを集中的にやってもらいたいと思うが、高校生の意見は。

小川 秀雄 (Chura★I)：

石垣島は観光が盛り上がっているけれども、観光客と自分たち(住民)とのつながりは見えない。周りの高校生は、この現状をジブンゴト化していない。どのように島や自然が自分に影響を与えてきたのかを見つめなおすことが必要ではないかと思う。島と自分がどう関わっているのかというものが無いから、愛が生まれにくい。

山内 琉大 (Chura★I)：

自分は生まれが島外で、小学校に上がると同時に石垣島に来た。生まれも育ちも石垣という子たちと話しても、島の良さを分かり合える部分がない。自分の足元に何があるのかということ深く考えることが大事。根っこを育てようとせず外に出ても、自分という樹は枯れてしまうだけ。外から来た自分から見たら、もったいないなと思う。

谷口：

外に出て、はじめていろんなものが見える。一番重要なことは、自分を磨くということに対して、きちんと自己投資の構造を作ること。僕は、旅が自己投資の対象になるという時代に入っていると思う。未来に対する投資がなければ、我々は回収ができない。短期回収ばかり繰り返すのではなく、目線の長い練習をすることが重要。課題を投げかけ、それに火をつける。高校生がやるバス会社でも良い。そういう夢を描いていけば、一緒にやろうとってくれる企業は現れる。誰かがやってくれるという発想ではなく、自分が立ち上がらなければいけな

い。石垣は、その未来の一つの理想舞台みたいなかたちの気配を非常に持っている。その辺は、金城さんなんかビジネスとして進められるような、島の未来への道筋というような事業にルートを変えて、楽しみと学習によってつなぎなおしていくのはどうか。

金城：

先日、修学旅行の先生たちを招いて、石垣、竹富町の島々を見てもらった。八重山のコンテンツは素晴らしいと大絶賛だったなかで、先生方からリクエストがあったのは、地元の高校生、地元の人と触れ合うコンテンツが欲しいというもの。地元の高校生と修学旅行生がバスに乗って島を案内するとか、放課後のクラブ活動に入って芸能体験をしてみようとか、そういった交流やふれあいがあればおもしろい。人と人とのつながりは、リピーターにもつながりやすい。

前田：

今後の石垣市の行く先は、今までやってきたことのブラッシュアップというよりも、今までないもののイノベーションというところに注力すべきだと思う。今までなかったような旅行形態だとか、価値観を変えるようなツアーを創出するべきなのかなと。うちの会社も、サンゴ礁の生態を勉強するツアーをやったことがあるが、全く売れなかった。今は見せ方といところが大きく変わってきているので、いろんな見せ方ができるはず。見せ方を変えて発信していくことによって、それを欲する人たちは世の中に結構あふれているのかなと思う。地域を良くしてくれる、還元してくれる人たちを招くというプランを立てられるとおもしろいのかなと感じた。

谷口：

サンゴの一つをとっても、感動を呼び起こすような伝え方があれば変わってくると思う。世界の共通課題に対してインパクトを与えることがあると石垣は世界の島になる。次の時代の富裕層というのは、金だけではなく美学やセンスを持っている。そういう人たちがリーダーとなる。未来のために情熱と時間を投資できるかが問われている。それに具体的なシナリオを与えない限り、単なる話の表層になってしまう。ツーリズムは世界の宝を発見するための未来への旅行だと言い切っていく位のそういうきっかけをこの会議は持っている。課題に対して発見するために聞く練習をしたというのがこの会議。その後は、それから何を我々は読み取るかというものに対して、正確とか速度とかではなく、そこにどういう未来の可能性が秘められているのかということを探らなければならない。今日はそういう可能性を皆さんに確認して、大きな背中への押し方としてこの会議が意味合いを持ったのではないかなと思う。

⑥ 閉会

⑦ 写真資料



谷口氏による基調講演



前田氏によるプレゼンテーション①



高校生プレゼンテーション②



パネルディスカッション